

特別企画 名誉会員インタビュー

日本放射線技術学会名誉会員 山下一也先生

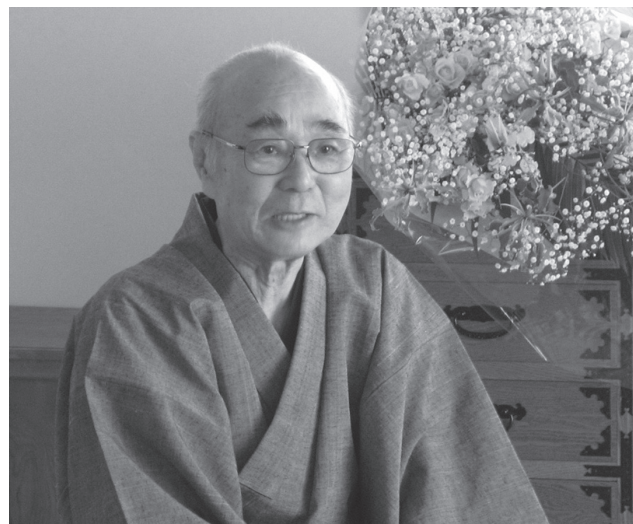
日 時：2009年6月6日(土) 9:30~10:30 神戸のご自宅にて収録
interviewer：日本放射線技術学会雑誌編集委員長 土井 司(大阪大学医学部附属病院)

2009年6月6日に私と大阪大学放射線技術科学学会代表：川本清澄さん、近畿部会代表：宮田嘉枝子さんの3人で神戸北六甲のご自宅を訪ねました。整然とした和服で出迎えていただき、お庭が眺められる1階の和室でのインタビューになりました。

土井 司(以下、土井)：技術学会に入られた当時の状況を聞かせてください。

山下一也先生(以下、山下)：1955(昭和30)年に学校を卒業したときに、技術学会に入会したんです。当時、僕らが参加できる学会は、技術学会だけでした。技術学会は非常に珍しい学会で「技術の学会なんであるのか」と盛んに言われました。その「技術の学会なんであるのか」と盛んに言っている人に「技術」とは何か、と聞いてみますと「技術」というものを勘違いしていました。僕らが考えている放射線技術学会の「技術」、あるいは僕らが持っている「放射線技術」というのは「科学に基づく技術」つまり「放射線技術学(radiological technology)」なのですが、その「技術学(technology)」という言葉自体を認めようとしませんでした。「科学に基づく技術」として理解すれば決しておかしくないのに、当時は特に放射線専門医は、僕らを小間使いのように見ていたような雰囲気がありました。昔の古いタイプのお医者さんって、そういう方が多かったですよ。今では技師さんも立派になって、お医者さんと同等に仕事をしていて、学位を持っている人もたくさんいます。ですから決して恥ずかしいことではないと思います。むしろ技師さんの方がしっかりしていますよ。

最近、小塚隆弘先生とお話しする機会が多いのですが、先生とは阪大病院中央放射線部にいっしょに就職した「同級生」なのです。ですから先生からは「山下さんとは同級生やなあ」と言われています。今、神戸の須磨に住まわっていて、昨年まで東大阪の病院の病院長をされていました。この4月に退任されて、「やっと肩の荷が下りました」とおっしゃってられました。小塚先生は、技師の僕らを病院になくてはならない「技師」として評価し、一番理解してくれてい



る先生だと思います。

土井：当時、阪大病院から技術学会に入会されたのは一人だったのですか。

山下：入会したのは1955(昭和30)年で、後年大阪府立成人病センターに移られた吉田次郎さんといっしょでした。あの当時は、今から考えてみると気楽な時代で、いつの間にか阪大病院に就職が決まっていたというような感じでした。3月下旬頃、突然に阪大病院から呼び出しがあって面接があったのです。「なんで面接があるのかなあ」と思っていたら、願書が出ていたということです。どうも内田先生が、それをなさったということです。

土井：内田先生が引っ張られたということですね。

山下：それで阪大病院に就職してからは、内田先生の学会発表や講演会などの仕事のお手伝いをさせられました。あの当時はスライドというものがなくて、模造紙にスライドのように10枚も20枚も書いて、内田先生が研究発表や講演をなさるときにそれを丸めて持って行って、紙芝居のように1枚ずつはがしていくのです。だから、私は今でも模造紙に書くのが上手ですよ。

土井：研究を始められたきっかけは、内田先生との出会いですか。

山下：そうですね。内田先生というのは技師学校におられるときから学問的なこと、学術的なことにうるさい方で、僕らの時代は「2 年制」なのに卒業実験があったんですよ。2 年生の後期になると研究というか実験というのか分かりませんが、とにかく内田先生が立てられた計画通りに 4 カ月間くらいは、時間がないのでほとんど毎晩徹夜してやりました。今でもよく覚えているのが、今はきれいになっていますが大阪駅前あたりには、ラーメン屋やうどん屋の屋台が並んでいて、夜遅くすきっ腹を抱えてみんなで押しかけたものです。今は排除されてありませんが郵便局の前に、こじんまりした原っぱがあって、そこでみんなで大声を出して歌ったりして遊んだものです。だから研究をしているのか、実験をやっているのか、遊んでいるのか分からないような感じでした。

土井：飴と鞭があったわけですね。

山下：それで思うのですが、研究とか実験することには、遊ぶことと食べることが基礎になっているかなという感じがしているのです。とにかく、よく食べて、よく遊びました。

土井：今でも若い方々と実験をしていると、やはり両方が必要だと思いますし、飲んでいるときにいいアイデアも出てきます。今も昔と変わらないように思います。ところで先生は、長年研究活動が続けてこられて、いつまでもモチベーションが高いのは、どこからくるのでしょうか。ずっと探究心を持ち続けるというのは性格的なものですか。

山下：僕自身、研究とか実験とか訳の分からないことを繰り返してやってきましたが…それがどのように僕に関わっていたのか、よく分からないままに今日まできたような気がします。今のところ、そんな感じがしています。

土井：内田先生との出会いが大きかったのですか。

山下：僕が学生だった頃、もうお一人「物理」をやっておられた宮永一郎先生という方がいらっしゃって、その先生と内田先生が専任の「学務」をやっておられました。その宮永先生は、僕らが学校を卒業してまもなく放医研の方に移られました。宮永先生は実験とか研究には熱心で、2、3回いっしょに研究発表をした経験があります。

土井：今までいっぱい研究をなされてきましたが、最も印象に残った研究って何ですか。

山下：いろいろありますが、卒業するときにした卒業実験が一番思い出に残っています。それを卒業した年に先輩が学会で発表をしました。それは「X線撮影に関する2・3の考察」で、後に論文にもなっています。それが一番印象に残っています。宮永先生の指導があったこの研究は、僕にとって最初の論文で処

女論文というようなものです。内容はガタガタで今から考えたらようこんな論文を公表したなあって思います。内容は別にして、論文の書き方が分からない時代で、ああいうのは記録に残るので恥ずかしいです。

土井：意外でした。「MTF」や「ROC」だと言われることを想像していました。

山下：その後、MTFやROCの研究と実験を重ねていったのですが、やはり先の基礎的な実験や研究が基本になっていて、私にとって非常に良かったと思います。

土井：ちょうど私が学生るとき、ルーサイトビーズで資料を作成して視覚評価のカーブを書きました。それが、学生するときには何をしているのか分からず、10 年くらい経って、先生の論文を拝見して「僕たちがやった実験じゃないの」って思ったことがあります。

山下：今学会の中心になっているのは何ですか。研究テーマでいうと。

土井：臨床の装置がどんどん進んでいますので、それを物理的にどのように解釈すればいいのかなど臨床技術的なことが多く、基礎に戻るというのがちょっと少ないような気がします。でも、テーマとしてはそこであってほしいと思います。

山下：臨床に結びついた研究というか、臨床を土台にした研究が多いですね。僕らのときには、臨床から離れたものが多かったような気がします。

土井：私たち技師にとっては、臨床で使うにあたって条件を変えたりするときに裏付けがほしいのです。その裏付けを得るために実験や検証をすることが多いです。医師に対して、このような条件はこのような理由があって定めているということを説明できる必要があると思います。しかし基本的な画像評価に関する活動ももちろんあります。

先生の長年の研究で一番こだわってこられたことって何ですか。

山下：僕には、特に「これこれ」というような、こだわりはなかったですね。ただ、僕には「しつこい」ところがあるのです。というのは、せっかく書かれた論文をよくけなしたことがありました。論文の内容はともかく「どうして、こんな書き方をするのだ」と偉そうなことを口はばったことがあります。だから、いくら「科学的な論文あるいは技術的な論文」であっても文章は「文章」ですので、言葉の使い方などをきちっとしなければいけない、ということです。論文の査読なんか回ってきたら、よくそのようなことを言って、著者から恨まれました。「そしたら、どないに書いたらええんや」と逆に言われたりして…。

土井：両方の気持ちが分かりますし、査読される立場として先生のお気持ちも分かります。

山下：だから「山下が査読するとしつこくなるから困る」というようなことを編集から言われたりもしました。

土井：私自身も先生に見ていただいて、言葉の統一的な観念ができました。文章の流れがスムーズに入ってくるような気がします。

山下：せっかく立派な研究内容なのに、書き方で一つもの足らなくなってしまうことがあります。よくよく考えたら、なかなか立派な論文だと思うこともあります。学会も論文の書き方を指導するだけではなくて、文章の書き方の指導とかも必要な気がします。

土井：結論の導き方や考察の仕方というようなセミナーはあっても、文章の言い回しとか文面を作成するような企画はありませんね。考えてみます。ところで、これからの若手や中堅、ベテランに何か望むことはありますか。それぞれに立場が異なるとは思いますが。

山下：何でもこだわりを持って「しつこく」やることでしょうか。それが研究の第一歩だと思います。特に若い人には、研究というものがいったいどのようなものが研究なのか。あるいは、どうしたら自分の考えていることが研究のレベルまで高まるのか…。研究のレベルまでいっていないのに、研究が終わったと思っている人が意外に多いように思います。最近はどうか分かりませんが、僕の頃はよくそう思いました。それでは研究の入り口で終わってしまっている。研究とか実験とかは、もっと奥深いものじゃないかと思うのです。

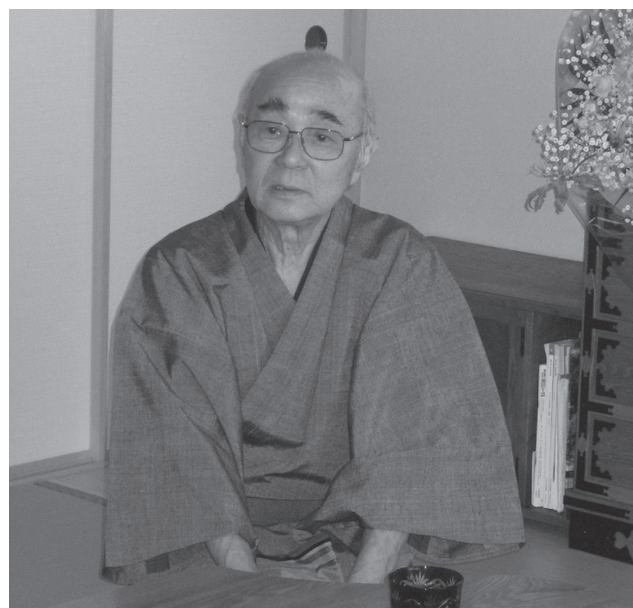
土井：ごもっともだと思います。先生に言われると重たいです。

山下：相当に経験のある、それなりに放射線技術や技術学を堪能されている方には、放射線技術や放射線技術学などを分かりやすく若い人たちに指導できる機会があればいいのになあって思います。学会誌を読んでいても、そのような議論がないですね。それでいて掲載論文を読んでいると明らかにその論文は「科学に基づいた技術」つまり「技術学」なんです。ですから「技術学」は、決して恥ずかしいものでも何でもないんです。それでも「技術学」をけなす人がいるのですが…。学会も「科学に基づいた技術」という意味で、若い人にどんどん論文を書かせるようにしないといけないですね。

土井：努力はしているのですが…。先生の言われることは絶対達成できるようにしたいと思います。

山下：とんでもなく難しい論文がありますね。理解できているのかなあ…。なぜ、そのようなことを思ったかと言いますと、引用している論文が、書かれている論文の引用部分に相応していないのです。内容とどうしてこんなに離れているのかと思うことがあります。

土井：一言だけの引用をしているのではないのでしょ



うか。最後に、技術学会に望むことは何かありますでしょうか。

山下：ベテランの学会員の人たちに、自分たちがやっている放射線技術とか放射線技術学とかというものの本質や基本をもう一度考えていただき、そのうえで、それぞれの考え方を出示してもらって、という具合に議論を技術学会のなかでできたらいいのにと思っています。

土井：是非、これを活性化につなげていきたいと思います。

山下：このようなことは若い方には無理なので、かなり臨床的な経験を踏まれた方々に、臨床を背景にして、そのようなことを議論してもらおうというような気がします。

技術学会のように「技術と技術学」を議論するような性格の学会は、世界でたった一つしかないのです。わが技術学会だけです。このような特殊性と特異性を持っているのは学術の分野では、わが技術学会だけです。僕は、それを遠慮せずにもっと誇っていると思います。最近、土井邦雄先生が出されている英文誌などを利用して、どんどん外に向かって国際的に出られたらいいと思います。

以上、ビデオを撮るのに気軽に場所の移動もしていただいて、なごやかな雰囲気の中にインタビューを終えました。奥さまが隣の部屋からなごやかに眺めておられたのが印象的でした。奥さまは、X線技師学校時代の1年後輩だそうです。途中、最近の健康に関する話題や訪問した者の身の上話などもあったのですが、ここでは省略しています。非常にお元気で昔のままの山下先生でした。

山下一也先生－学会歴－

【役員】

1971～1993年	理事
1972～1976年	企画委員会委員長
1972～1973年	技術史刊行委員会委員長
1974～1981年	総務理事
1979～1988年	技術史委員会委員長
1982年	会長
1983～1984年	研究奨励委員会委員長
1985～1991年	画像分科会会長
1988～1993年	学術委員会委員長
1988～1991年	海外留学委員会委員長
1988～1991年	梅谷賞選考委員会委員長
1991年	将来構想委員会委員長
2000年～	名誉会員

【表彰】

1979年	瀬木賞
1981年	奨励賞
1988年	梅谷賞
1990年	学会賞
1993年	瀬木賞
1994年	法人取得に対する功労(第50回総会記念特別表彰)

【学術大会】

1972年	シンポジウム座長「軟部組織X線撮影技術」
1975年	シンポジウム座長「X線写真の画質」
1977年	宿題報告「X線像の画質評価の問題点とその展開」
1983年	第39回総会学術大会大会長(大阪)
1983年	シンポジウム座長「放射線医療技術の研究のあり方」



前列左より土井，山下一也先生，奥さま。
後列左より川本清澄さん，宮田嘉枝子さん。